

会員紹介：和気邦夫さん

私の略歴



1943年川崎生まれ。1962年東京都立西高等学校卒業後、すぐにアメリカのグリネル大学政治学科に留学(Bachelor of Arts)、1966年卒業。更に1967年ピッツバーグ大学大学院経済社会開発学科修士課程を修了して帰国。1968年国際キリスト教大学大学院国際行政学科修士課程中退し、(社)海外コンサルティング企業協会に勤務。1971年にUNICEFに入り、インド、バングラデッシュ、本部、パキスタン、ナイジェリア、日本の各事務所で勤務。1997年から2000年まではUNDPに勤務、そこで国連改革の仕事をした後、2000年から2007年まで国連人口基金事務局次長として勤務。以後、現在まで関西学院大学総合政策学部特別客員教授。また、2010年～2013年には近畿大学総合社会学部客員教授。この間、1998年グリネル大学より名誉博士号(Doctor of Humane Letters)を授与された。今後は、大学での教鞭での傍ら、新設のTAKUMI and Associates社にSenior Consultantとして参加し、社会貢献を果たしたいと願っている。

来年で私は75歳になる。12年間客員教授として教えていた関西学院大学総合政策学部での授業も来年が最後の年だ。この機会に自分の人生を振り返って開発の仕事にどう取り組んできたのかを考えてみたい。

従事した仕事の内容

(社)海外コンサルティング企業協会時代(1968年～1970年)

ピッツバーグ大学で修士号を取って6年ぶりに帰国した。開発をアメリカで勉強した若者に就職口は簡単には見つからないと思ったので取りあえず国際基督教大学大学院の国際行政学科の修士課程に入れてもらった。その時の級友には後で海外コンサルティング企業協会(ECFA)に来てもらった賀来さんと柳坪さんがいる。

朝日の求職欄を見ていたらECFAが求人していることを知った。どのような組織なのかよくわからなかったが、開発の仕事で日本の技術者が海外に出ていくのを支援する仕事であること、それに事務所が当時最新の高層ビルであった霞が関ビルにあったことも魅力的だった。事務局長の山口さんは有能な方だった。我々のような若者を育てようとする意欲が旺盛でECFAからは多くの人材が育ち、JICAや会員コンサルティング会社、それに国際機関に巣立っていった。山口さんは先駆者で国際開発センターの設立や政府の技術協力システムの改善に貢献した。

この時 ECFA に来てくれたのが SRID 会長の藤村さんである。神戸から面接に来てくれた時に初めてお会いした。その後生涯の友人になり、ニューデリー、サセックス大、ニューヨークや神戸でもお会いすることになった。ECFA で一緒だった藤村さんと菊池さんは JICA で看板になる良い事業を立ち上げ世界で活躍することになった。

私は留学帰りでおかしな日本語で話していたので ECFA では役に立たない存在であった。今でも当時の同僚たちにはすまないと思っている。ECFA では日本の経済協力のシステムを学ばせてもらった。これは後で国連の仕事をするようになって大変役にたった。また山口事務局長のカバン持ちで多くの日本の指導者に会う機会をいただいた。その中には大来さん、土光さん、中山素平さんなどがいた。また思い出すのは日本揮発油の記念パーティーで高齢の新橋の芸者さんにも会える機会をもらったことだ。彼女の顔は広く財界のリーダーを良く知っていて彼女のそばにいと私を彼らに紹介してくれた。後で国連事務総長のアナンさんの公邸でレセプションがあった時、アナン夫人が私を CNN のシニア特派員に紹介してくれたが、当時の新橋の芸者さんたちは奥さんが出てこない日本の社会で重要な役割を果たしていたのではないかと思っている。

ECFA では日本政府の技術協力にも参加させてもらった。インドネシアの電力調査で 8 か月東京電力の専門家チームとジャカルタに赴任した。現地事務所の運営や英語で政府や世銀に出す報告書を作る仕事のお手伝いをした。また現場にも連れて行ってもらい電力事業を発電から、送電、配電それに料金の設定まで少し勉強させてもらった。観念的には開発途上国のことは少し分かっていたつもりだったが、その時開発途上国で住み、仕事をするに自信を持つことが出来るようになったと思う。その他カタールを含む中近東にも短期間行かせてもらった。

ユニセフ時代

インド事務所

1971 年の 1 月にユニセフの職員としてインドに派遣された。最初に与えられた仕事はユニセフの北インド代表として北部 4 州の政府と交渉しながら中央政府と決められたプログラムを実施する仕事だった。ユニセフのこともあまり知らないうちに 27 歳で小さなユニセフの地域事務所の所長に任命された。当時ユニセフでは未だ国際スタッフの数は少なく、日本人は私一人だった。我々若い国際スタッフは最初から将来のリーダーとして活躍できるように経験の豊富な上級職員から助言を受けながら大事に育てられたと思う。私の最初の仕事は主にプログラムの進捗状況をモニターし、現場での問題を解決することだった。それで月に 10 日間は出張で家にはいなかった。ユニセフでは先ず新入職員にドサ周りをさせて開発途上国の現実を理解させていた気がする。インドの州政府の行政、地方政治、農村地帯の貧困や社会問題それにインドの子どもが直面している諸問題について現場を見て回ることで理解できることが多かった。州政府の役人、医師、エンジニア、ユニセフのインド人専門職員からも多くを教えてもらった。

ユニセフが支援していた活動は多彩だった。農村の栄養問題を解決するために母親や子

どもに対する栄養教育、家庭菜園の普及、学校や地方政府の所有する土地での野菜や果樹の栽培、動物性たんぱく質の補給のための養鶏の普及や村の池を使って魚の養殖、深井戸や手動ポンプによる農村水道、小学校での科学教育の導入、子どもの健康と生存のための予防注射や健診活動、保健所への機材や医薬品の供給、都市のスラムでの社会開発、結核の予防と治療、医学生や医師の教育、農村女性の経済活動や教育活動の支援などであった。

僻地の村に行ってもユニセフのことを知っている人は多く歓迎された。州政府の役人も来ないような山岳地帯にも出かけていった。女性農村指導員たちも私を村の隅々まで案内してくれた。特に印象的だったのは西ベンガル州やアッサム州がブラマプトラ河の氾濫によって大洪水に見舞われた時だった。インドの支援要請が遅れて我々が現地に入ったころは多くの小さな子どもたちが栄養失調に襲われていた。



村に入っても人々は裸同然で痩せこけた状態で我々を迎えてくれた。近くに住む地主の倉庫には米などの食料はあっても裕福な村の地主たちは少しばかりの食料しか村人に分け与えていなかった。アメリカの NGO が支援しているプロジェクトを見せてもらった時、痩せこけて弱っていく老人の姿を見た。その時私は貧しい民衆が無力なこと、ユニセフのような国際機関が人道支援をしなければ農民や子どもたちは死んでいくような災害の悲劇があること、そしてユニセフの職員としての職業的・道義的な責任の重さを感じた。

インドで次に与えられた任務はだれもやりたくない泥臭い物資の調達や運送などロジスティックの仕事だった。そんな時に大きな人道支援が始まったのである。インドの北東部では洪水が、その後デカン高原では旱魃がおしよせた。30 歳になったばかりの私は 100 万人の小さな子供たちと母親に食料、衣類、毛布、医療品などを届ける人道支援の中心的な存在になってしまった。ユニセフが支援したミルク工場で乳幼児向けの特別の食料を作ってもらい、インド食糧公社には 2 歳から 5 歳の子ども向けにトウモロコシと大豆ベースの特別の栄養食を作って現地のボランティアに給食として食べさせてもらった。まさに戦争の様で毎朝関係スタッフに集まってもらって各地から入ってくる倉庫や支援活動の状況についての情報を分析して、物資を汽車やトラックで運ぶ指示を出した。この時の経験はその後自分の大きな自信につながったと思う。

帰国してから白水社の依頼で「ユニセフではたらこう」と「ユニセフの現場から」という 2 冊の本を出させてもらった。26 年間はたらいたユニセフでの経験と現場での仕事のやり方、直面した問題にどう対処したかなど本の中で書かせてもらった。日本の若い人たちには国連開発機関が現場でどう働いているか、そしてそれがどんなに泥臭い仕事であるかも伝えたかった。

バン格拉デッシュ事務所



インド、アッサム州の洪水の後

5年半インドで働いた後に送られたのは隣国のバン格拉デッシュだった。内戦やサイクロンの痛手から十分立ち直っていなかった厳しい環境の中で大仕事をまかされた。バン格拉デッシュ政府、NGOs、大学や研究機関と一緒に国家開発5か年計画に合わせてユニセフ支援の5か年計画を作る仕事だった。20人ぐらいのユニセフの専門職員を動員し、本部やバンコクの地域事務所のスタッフの助けを借りて5年間1億2千万ドルのユニセフの資金を導入する計画を立てた。その半分が

自己資金で残りは各国の政府や財団などに売り込んで資金調達をしなくてはならなかった。そのため計画作成の最初の段階からドナー国の参画を求めた。

ここで開発された country programming の手法がユニセフ組織全体で取り入れられることになり、私はその後ミャンマー、タイ、フィリピンなどに5か年支援計画作成のお手伝いに行った。その時各国の政府の若い優秀なスタッフと一緒に働き仲良くなったのを思い出す。関西学院大学総合政策学部では“Think global, Act local”という言葉が教育のスローガンにしているが、たとえインドの地方で働いていても、バン格拉デッシュで新しい手法を実験的に開発していた時もユニセフ組織全体のことも考えていた気がする。これは大学や大学院での広い教育のおかげだったと思う。新しい知的なことにチャレンジし広く組織のマネージメント問題を考え自分の意見を発信していた。そのため本部にも早くからそれが認められて、ユニセフの組織改革のワーキング・グループのメンバーにも加えてもらった。

ニューヨーク本部

その次の任地はニューヨーク本部だった。プログラム部のアジア課長になりアジアのユニセフの事務所のサポートや当時ユニセフの事務所長だったジェームズ・グラント氏のアシスタント、それに理事会や支援国への対応などが任務だった。その時経験したのはそれまで知らなかった国連外交の世界だった。各国は有能な外交官をニューヨークに送り込みユニセフのマネージメントやプログラムについて討議をして決議を出していた。



またアジア各国にも行って農村地帯でユニセフのプログラムの実施を見て回った後、策定中の政府の 5 か年計画に合わせたユニセフの支援計画を政府やユニセフのスタッフと話し合った。

東アジア地域事務所

その後はバンコクにあるユニセフの東アジア地域事務所の次長になりタイ、カンブチア、北朝鮮、インドネシア、パキスタン、フィリピンなどに行く機会があった。印象的だったのはカンブチア（カンボジア）で軍事紛争と虐殺の後の貧しく困難な状況だった。当時カンブチアは国連でも承認されていなかった国で、ユニセフの職員は人道支援のために特別に入国し活動が許されていた。銀行もなくユニセフの現地事務所はドルで支払ったり、ドルの現金をマーケットで現地貨に変えて活動をしていた。首都プノンペンに行くとき紙包みを渡された。中には100ドル紙幣が20万ドルも入っていた。途中問題がありそうな予感があったので私はスタッフにユニセフの公的なシールをたくさん紙包に押しもらった。何かあった時外交荷物として認めてもらうつもりだった。空港のセキュリティー・チェックで私のカバンがX線にかけられた。するとどこからか男性がやってきてその包は何かと聞かれた。彼は私がドルの現金を運んでいるのを知っていたと思う。正に外国為替法違反行為をしていた訳である。それでもユニセフの職員がカンブチアに行くと言って私を特に見逃してくれた。ユニセフの2千2百万円相当の現金の包が没収されたら大変なことになったはずである。その時はさすがに冷や汗をかいた。



ミンダナオ島：村長と反政府の少数民族 国連の調停・平和構築活動

北朝鮮には2度行ったことがある。ユニセフが支援する可能性を探り交渉をすることだった。政府の外務省のスタッフもユニセフのことを知らないので話が合わなかった。それで私は彼らをバンコクに招いてユニセフについての私たちの事務所でブリーフィングをしてタイでどんな支援をしているか見て回ってもらった。その後は話がスムーズに運んだように思われる。私は韓国の地方も訪問して政府の人たちと交歓をしたこ

とがあるが、北も南もなく同じ民族であることを感じた。お酒に強い人も多かった。ちょっと怖かったこともある。仕事が終わる直前に北朝鮮の外務省が私たち2人を金剛山に連れて行きたいと言いだした。一度はお断りをしたが彼らが誇りに思っている名所に行くのを断るのも失礼になると同意した。暗い夜汽車に乗って東に向かった。窓からは何も見えなかった。泊まった宿舎はソ連が支援した建物でドアには頑丈なカギがかけられていた。あるとき中でドアが開けられなくなった。一瞬閉じ込められたような思いが体に走ったのを覚えた。5秒ぐらいしてから我に返り電話でフロントに助けを求めた。するとすぐに女性のスタッフがドアを開けて来てくれた。

パキスタン事務所・ナイジェリア事務所

その後本部が私を送ったのはユニセフで一番難しい任地と言われていたパキスタンとナイジェリアだった。事務所長としてリーダーシップを発揮して難しいマネジメントの問題に取り組むことになった。両国とも治安が悪く、汚職の文化が社会にはびこっていた。たぶん多くのユニセフの上級職員はパキスタンとナイジェリアに行くのを断っていたので私に回ってきたのではないかと思っている。ユニセフで働いている限り、危険な任地で生活や仕事をしなくてはならないのは当たり前であり、与えられた重要な仕事を断るのは自分の主義や生活信条に反すると思っていた。当時のパキスタンの首都イスラマバードは未だ比較的安全な街だった。家族はテニスをしたり犬を飼ったりして結構楽しんでもらったと思う。それでもイラクに戦闘が始まると国連の車に石が投げられたりした。シンド州で我々の出張中農業大学の学生ストを始め車やバスを止めてタイヤを燃やしていた。その燃えているバスの横を通り過ぎて州の首都カラチに戻ったこともある。

パキスタンでは国連のアフガニスタン事務所のスタッフが地方の反政府グループに支援物資と一緒にハイジャックされ、私は他の国連機関の事務所長と一緒にペシャワールにいたムジャヒディーンの長老に解放するよう働きかけるのをお願いに行った。幸い地元の長老会が若いコマンダーを説き伏せてユニセフのスタッフを含めた国連職員を解放してくれた。その時無線で彼らの声を聴いた時は感激だった。中央アジアのユニセフのスタッフからも無線で「解放おめでとう」という声が入ってきた。その時から治安のよくないところでは無線などのコミュニケーション手段の重要性を感じパキスタンやナイジェリアでは通信設備の強化に努めた。ナイジェリアでは私も武装強盗団に襲われた経験があるが、ユニセフの運転手の機転で何とか難を逃れられた。現地では事情を良く知っている人たちのサポートがなければスタッフの安全を守れないこと、また良い情報を複数のところからもらって総合的に判断する必要も学んだ。とにかく自分の事務所のスタッフの命に係わることだったので真剣にならざるを得なかった。

日本事務所・UNDG

ナイジェリアでワイフが病気になりロンドンの病院に入院し、その後東京の病院に入院することになったので、ユニセフの本部は気を使って私をユニセフ東京事務所の所長にしてくれた。それから国連改革の仕事でUNDPの中にあるUN Development Group Officeの次長として3年間働いた。国連の開発機関や専門機関が現地で一緒に支援計画を立て、分業しながら協力してより効果的に働けるようにUN country teamの仕事のやり方、プログラムに関する各分野の共通した政策を決めたりするのにリーダーシップを取らせてもらった。また新しい支援のフレームワーク、方法論、新政策などのトレーニングのためにヨーロッパにあるUNESCO, WFP, FAO, UNVなどの本部にも出向いて行ったことがある。この時はユニセフからの出向で働いていたがユニセフの利害を超えて国連全体のことを考えて仕事をしたので、その後UNFPA(国連人口基金)の事務局次長になった時も国連全体でプログラム政策を決めるUNDG Programme Groupの議長を二年間務めさせてもらった。

UNFPA 時代

残念ながら UNFPA での 7 年間の経験については紙面が無くなってしまったので詳細はまたの機会にすることにする。ただ当時は日本の拠出金の額が大きく日本人である自分が事務総長によって国連機関の政治的なポストに任命されたのは幸運だったと思っている。仕事でアフリカ、アジア、南アメリカ、中央アジア、東ヨーロッパなど世界中に行く機会があった。特に国連にとってアフリカは重要地域だったのでニューヨークから年 5 回ぐらい行くことになった。エチオピアの首相やマリの大統領にも会ってもらえた。キューバの指導者カストロとも若者を社会開発にどう動員していくかについて話したのも思い出される。国連人口基金の改革にも少しは貢献できたと思っている。今では懐かしく思われるが当時は世界中を飛び回っていて忙しくよく体がもったものだと思う。

仕事上の苦勞と喜び

国連で働いていて一番良かったと思えるのは世界中で魅力的で人間性豊かな人たちと会えたことだ。ユニセフや UNFPA には情熱的に開発途上国の子どもや女性の問題に取り組んでいる同僚が多かった。危ない紛争地や災害後の僻地にも進んで出かけていった。農村地帯や山岳地帯でも住民の生活の向上のために働いている多くの農村生活指導員、農業指導員、保健所の医師や保健師に会った。地方政府のリーダーにも献身的に働いていた人も多く、農村地帯をいっしょに回りながら彼らから学ぶことも多かった。

私たち国連職員はどこに行っても丁重に扱われた。開発途上国では指導者たちがユニセフや UNFPA が子どもや女性の健康や福祉の向上に貢献しているのを知っていた。村々でも歓迎を受けた。また仕事の関係で観光客としては行くことの出来ない奥地や治安の悪い地域にも護衛をつけてもらって行くことが出来た。

仕事の面ではユニセフの食料・栄養援助で見る見るうちに栄養が回復して元気になっていく子どもを見ることが出来たこと、ナイジェリアやパキスタンではすべての子どもの 80 パーセントに予防注射が出来たことなど具体的な成果を出していったことは自分の達成感につながったと思う。

半面ナイジェリアのように頻繁に停電があり、盗難や強盗などの事件が多い国もあった。選挙の直前などには首のない死体が道路わきに捨てられているのを見たりした。自分がそんな目に合う可能性もふと頭をさえぎったこともある。こういった生活環境はどこに行っても一緒についてきてくれた家族にとっても大きなストレスの原因だった。事務所の運営のためにも燃料のジーゼルを確保するのが私の大きな悩みだった。停電が長く続くと仕事ができない。発電機を回してコンピュータやエアコンを動かす必要があった。ジーゼルがないと 4 輪駆動のジーゼル車を動かすことも出来なかった。また任地には医療設備のお粗末なところも多かったので職員や家族が病気になると心配だった。重病の場合は他の国へ搬送しなくてはならなかった。

私の生き方

自分個人としては冒険とロマンを求めて歩き回った人生だったと思っている。客観的には社会貢献もしてきたことになるが、自分がやりたいことをやれたことを幸運だと思っている。そんな人生を可能にしてくれた両親と私の上司たちには感謝している。判断を誤り後悔したこともあるが満足感のある人生であったと思う。これからは少し社会貢献もさせてもらいながら好きなフライフィッシングを年2回することを楽しみにしている。次は3月にニュージーランドの南島に



マス、8月にはカナダのブリティッシュ・コロンビア州にサケとスチールヘッドを釣りに行く予定だ。河に入って滑る石の上を歩きながらの釣りなので何時まで出来るか分からない。9月に行ったカナダのスキーナ川では80歳のシアトルから来た医者が竹の杖を使いながら川に入って釣っていた。今は彼をモデルにして80歳までは頑張ってみよう。冒険とロマンを求める人生はぜひ死ぬまで続けていきたいと願っている。